

木もれ日通信

戸越八幡神社一箱古本市通信 第3便

第3便は実行委員の
近況?をお伝えします笑

ブログ <https://togoshihitohaka.com/>
発行：戸越八幡神社一箱古本市実行委員会

神社は今

下の写真は2月末現在の本殿の裏です。2月から本格的に始まった、御鎮座五百年御社殿改修記念事業。御社殿を現在の位置から曳家する箇所ができています！木々が茂っていた本殿の裏側はすっきり視界が開けて、本殿の後ろ側がよく見えるようになりました。



樺と銀杏の、2本の御神木が立っている間を通して御社殿を後ろへ移動させるのは5月頃になるそうです。

現在、御神体は境内の社務所に仮遷座されています。一般参拝のために、御社殿の前に仮拝所が設けられています。

とごしについて

誰も、今住んでいる、暮らしている、関わっている街に出会うきっかけがあるはず・・・。
実行委員にとっての戸越とは、戸越との出会いとは・・・？

田んぼと畑の中に浮かんでいるような、地方の住宅街で育った。

真ん中に一本通った、いわゆるメインストリートには小さいとはいえ商店街があって、こどもの頃は母にくっついて野菜は八百屋で、魚は魚屋で、肉は肉屋で買っていた。小学校の同級生とは、放課後は駄菓子屋に集まって遊んでいた。中学生になる頃にはもう、どのお店も閉じて商店街はなくなってしまったけれど。

都内で一人暮らしをしようと思い立った時、たまたまテレビで見た武蔵小山の商店街が目をつけた。実際に商店街を訪れたとき、わくわくしたのを覚えている。他にもまったく別の方面、それこそ都内を横断したり縦断したりして探したのだけれど、最終的に戸越の商店街がいいなと思って戸越で部屋を借りた。

とくに会話するわけではなくてもよく行くお店の人の顔は覚えたり、逆に自分のことも覚えられているだろう。いつも決まったものしか注文しないから、こちらが言いたす前にこれでいいですかと言われてしまったこともある。どのお店も開いていていつも人通りが絶えず、昔から変わらないのだろうなという店構えの中で見知った顔がお店に立っている。もちろん新しいお店もたくさんあるし、スーパーもあるからそこでほとんど買ってしまっただけけれど、お店をほしごして買い物をしたりするのも、自分の原風景には商店街があったのかもしれないと今になって気づく。

消えてしまった原風景を追ってきたのが、私にとっての戸越かもしれない。(さ)

「商店街のある生活」を抜け出せない！

社会人になる時に、仙台から大阪に引っ越した。部屋探しのために梅田界隈を歩いていたら、天神橋筋商店街に突き当たった。天神橋筋商店街は南北2 km 以上にも及ぶ長〜い商店街。歩いていると、往来する人の密度の高い6丁目から南端の1丁目あたりまで変化が楽しく、庶民的で日常的な親しみを感じる雰囲気から惹かれてこの商店街の近くに住みたい!と思ったのだった。

商店街を毎日歩く日常は、自分もその街の一員なんだということを強く感じる。夕暮れ時の買い物帰り、同じように買い物袋を持ったおばちゃんたちの行き交う姿を見て、安心する。他所行きの百貨店やショッピングセンターとは違い、自分と同じようにこのまちに暮らす人々を、より身近に感じさせてくれるような気がする。

そういう訳で、東京に転勤になった時、"さて、どの商店街にする?" から部屋探しが始まった。ちょうど、商店街の通りの黒い電線が目の前を通る黒い部屋で東京生活が始まった。

新陳代謝の激しい戸越銀座商店街は、老舗と新規オープンが入り混じっていつも変化が新鮮。宮前商店街のオオゼキに、昼夕わらわらと集まる買い物客に1日の時間の流れを感じる。夕焼けと戸越公園通り商店街のぼんぼりの灯りに季節を感じる。

今は戸越を離れたけれど、今もまた商店街のある生活をしている。(ま)



初めて見た戸越の印象は、情報番組で時おり目にする「食べ歩きのできる日本一長い商店街」。

特に食べ歩きの趣味の無い私にとって単なる通過駅のひとつに過ぎなかったのだが、戸越八幡神社の一箱古本市へ参加したことがきっかけで今では一番馴染みのある街となった。

浅草線を降りるとすぐに戸越銀座商店街がある。初めて神社へ向かう道すがら、故郷の町名を冠した名前の店が目に入った。

北海道から遠く離れた東京で見るそのローカルな地名は、沢山のお店と人で賑わう商店街の雑踏の中でもひと際はっきりと見えたように思う。そんなこともこの街に親しみを持つようになったきっかけの一つだ。

戸越銀座から分かれた道を歩くともうすっかり馴染みになった戸越八幡神社があるが、更に進むと宮前商店街がある。

戸越銀座に比べると店数も少なく随分と落ち着いた雰囲気だが、その分生活に溶け込んだ商店街としての顔が見える様子が心がほっとする。

宮前商店街を更に進むと大きな通りを挟んで戸越公園通り商店街がある。まだ数回しか訪れたことはないが戸越銀座と宮前商店街の間くらいの規模で、池上線沿線という土地柄もあってか下町感がぐっと顔を覗かせる。狭い道に個人店もチェーン店もどちらもぎゅっと詰め込まれている雑多な感じも心地よい。

3つそれぞれの個性を持った商店街が連なって混在していることが「戸越」という街の魅力のひとつだと思う。ぶらぶらと街をぶらつくには覚えのない世の中の状況ではあるけれど、落ち着いたらもう少しこの街の魅力を探しに訪れたい。(き)





JR上野公園公園口

柳 美里 著 河出文庫 2017年

茨城に住んでいた私にとって、上野は東京の入り口みたいなイメージがあった。高知の祖父母の家に行くときに、スーパーひたちを上野で降りて、上野駅の構内を歩いて山手線に乗り換える。その途中、ガラスのショーケースに入ったパンダの像を見て、“これから飛行機に乗りに行くんだ”という気持ちになった。

福島県八沢村(現・南相馬市)から出稼ぎに上京してきた主人公にとっても、上野は東京の入り口で相馬への帰り口だった。そして、67歳の時に上野公園でホームレスになった。

上野公園に行った記憶で一番古いのは、中学校の遠足で私の班は上野動物園とアメ横を選択して行った時のこと。その後、大学生の時に国立西洋美術館が設計課題の敷地になったり、就職してから結婚する友人のためのビデオを上野公園で撮ったり、仕事の関係者と一緒に上野公園界隈を視察しにきたりもした。

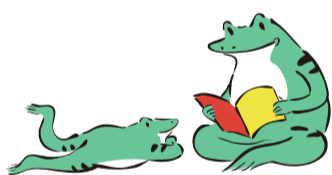
もしかしたら、上野公園に何かしらの思い出がある人って多いんじゃないだろうか。ただ、こんなに上野公園の記憶があるのに、上野公園に住むホームレスを見た記憶はない。

人生に慣れることのできなかった主人公が辿り着いた上野公園。昭和天皇と同じ誕生日に生まれ、平成天皇と同じ誕生日に生まれた息子たちを養うために、福島から東京オリンピックに伴う土木建設現場に出稼ぎに、家族と離れ20年を過ごす。

どの場所にも染まることも馴染むこともなかった主人公。そして、上野公園も、排除アートや山狩りでホームレスを追い出す。

読み終わって、絶望も感動もない。ただ、最初から終わりまで、駅のホームの電車を告げる音と、上野公園界隈の雑踏が頭の中に残ったのだった。夫のお祖母さんに「面白いから読んでみて」と勧められて手にとった本。“しみじみとした人生を感じる”のだそうだ。

90歳の感じ方と30歳の感じ方はきっと違うのだろう。面白い、の心やいかに。



イベントレポート

写真家 山田真優美 × 歌人 近江瞬 二人展「ただ、いま」

2021年2月13日(土)～3月14日(日)の間の土、日、月 @石巻まちの本棚

2月13日にzoomでトークイベントが開催された。当たり前で当たり前ではない日常を大切に写留めた写真と言葉を石巻に見に行きたい。

星空と路(みち)

3月10日(水)～3月14日(日)、3月16日(火)～4月18日(日) @せんだいメディアテーク

東日本大震災による甚大な影響に対し、ともに向き合い考え、復興への長い道のりを歩きだすために開設された「3がつ11にちをわすれないためにセンター」。様々な記録とプロジェクトの展示と上映がされている。

ぼくがゆびをぱちんとならして、きみがおとなになるまえの詩集

齊藤 倫 著/高野文子 画 福音館書店 2019年

まずはそのタイトルに惹かれ、1話数ページ読んだ時点で「これはなんだかすごい本だぞ」という高揚を感じた。

詩集のような小説のような、不思議な本だ。小学生の「きみ」が、おじさんの「ぼく」の家にやってきて、なんでもない学校のできごとなどを話していく。その中で、おじさんがこれ読んでごらん、と本の山からひっぱりだしてきた詩の本を手渡す。まど・みちおや、長田弘、荻原朔太郎、石垣りんなどの詩人の詩が挿入され、詩の入門的な側面もある。その詩を介して、「ことば」について、詩について二人でやりとりが交わされる。「きみ」の疑問に「ぼく」が答えているようで、「きみ」が見つけた答えに「ぼく」はたぶん感動している。大人にはもはや当たり前と思っている「ことば」とはなんなのか、立ち止まって考える機会をくれる。「ことばって、なに?」と聞く「きみ」と一緒に考えてみると、小学生の頃に授業で詩を作ったことを思い出す。かわいげのない子供だったので、教師にうけそうな技術的なことばかり考えていたが、ほんとうはもっと自由に作ってよかったのだと思う。

児童書ではあるが、大人だからこそ楽しめる部分もあると思う。読み進めていくごとに「ぼく」と「きみ」の関係性が分かっていく過程とか、おじさんが毎回なにか食事を用意している様子が、なんともほほえましいとか。ちゃぶ台を二人で囲んで、一緒に食べて、詩と一緒に読んで。そんなふたりのやりとりを、隣の部屋とかから聞いていたい。

うまいものが食べたくて

金子 信雄 著 講談社文庫 1984年

食べ物に関するエッセイを読むのが好きで、古本屋さんの棚(主に百均棚)を見ていて気になるタイトルを見つけたととりあえず買って置く。

そうして求めた本の大半は枕元に積んであるのだがきちんと読み進めた試しがほぼ無い。

決して自慢げに言えることでは無いのだけれどそういう人は多いのではないだろうか…(と独り言ちて自分を安心させる)。

調べてみると著者の金子信夫は任侠映画などで活躍した俳優だが、料理研究者としても知られておりテレビの料理番組も持っていたとのこと。

本書をぱらぱらとめくると、軍隊時代の食事から戦後の食糧不足時にも酒には恵まれた話、訪れた国や最員の店などの味を思い出と一緒に綴っている。

後半には自らのレシピも載っていて料理研究者としての顔も垣間見える。

ああ面白そうだな読み進めたいなと思う。でも逸って読んでしまうのはもったいない。休みの日の昼下がりにゆっくり読むことにしよう。

そうしてまた枕元に積んでおくのである。

2020年の第22回図書館総合展アーカイブ

図書館総合展は、図書館に関わる様々な展示、話題提供、交流が、様々な図書館界隈の関係者などで繰り広げられる一大イベント。2020年11月1日から30日に開催された「第22回図書館総合展 ONLINE」の会期後も見られる動画アーカイブが公開中で、とても興味深い話題がたくさんです! 図書館デザイナーや大学の先生などが好きな図書館について語る動画など、とても面白かったです。



勝手にカウントダウン

2021年の第5回戸越八幡神社一箱古本市まで、あと8ヶ月!

今年は10月にみなさまとお会いできることを楽しみにしています。